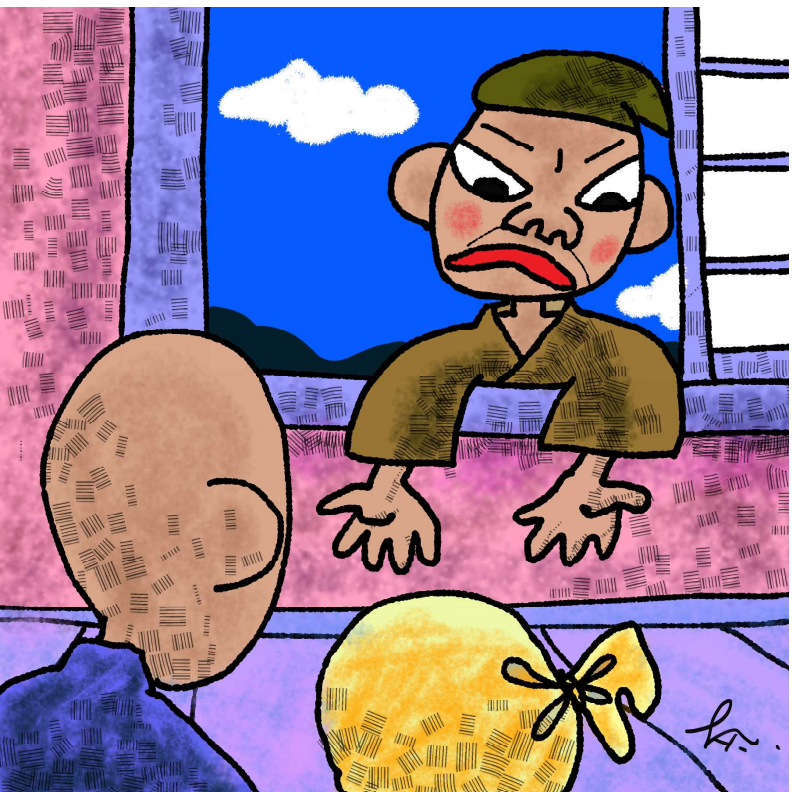


毘沙門天からの福もらい・邑智郡美郷町都賀本郷

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男

令和3年7月27日掲載



語り手 高橋ハルヨさん
(明治35年生まれ)
収録・昭和49年7月29日

あらすじ

昔、正月の一日の朝間に宮参りをしており、隣の爺さんに、「参りなさらんかい」と言ったら、「神さんによろしゅう言うて、福の神さんがありゃあ、もろうてもどっちゃんさいや」と言う。

「参りもせんにに：福の神はだれがやろうにやあ」と思っ

隣の悪いおじいさんが参って「福の神さんは、わしに授けてやんなさい。隣は横着して参らんが、わしやあ参っただけえ」と一生懸命頼んだげな。そしたら、高いところから、何か袋が落ちたそう

「ありがたよ。福の神やわしがもろうた。大けな音がしたけえ、金があつとある」と袋の口を開けたら、人の首が出た。「やあれ、こがあなもんなら、隣の親父い投げこんでやるがええ」と腹をたてて、人の首を抱えてもどつたげな。そうして隣のじいさんの家

の窓から、「もどつたで。福の神ももろうたでやるで」と、その首を隣の家の座敷へ投げこんだげな。

「わしやあ横着うしたのに、あんたあ福の神をこれえくださるか。すまんことをしたのう」と言う。

「なに、喜びやあがつたけえ、人間の首だあや。たまげあがるけえ」と思っ、自分の家へ帰るとすぐに窓を閉めて寝ているのがよいと思っ、そうしただげな。

首を投げこんでもらつた家では、袋を開けてたら、黄金がいつぱい入ってて、「もつたいないことだつたのう。お初穂ほどないと持つて行かにやあすまんけえ、礼に行こう」と思っ、神さんに供えて、お燈しをあけて拜んで、膳の中へ小判のお初穂を入れ隣へ持つて行っ、「おつあん、おんなさるかな」と言つたら、「じいさん、寝てしもうとらあな」と言っ、ばあさん、えらい声が荒いげなから、隣のよいじいさんは、頼むけえ開けちやんさいや、お礼に来ただけえ。

あんまり言うものだから、ばあさん、ちよつとばかり開けたら、「これにやあ、えつともろうてもどりんさつたこと

だろうけえ、こがあにやあ要るまいが、それでも心ばかりのお初穂だけえ、どうぞしもうといちやんさい」と言っ、小判を持つて行つたものだから、ばあさんは、魂消返っ、「どがあしたことか」

それから、じいさんも起きあがつて、あんまり腹が立つものだから、また宮へ馳けつて参つたげな。

それから、神さんに悪口雑言を言つたら、神さんが出られて、

「しかたがないよ。おまえは平生横着で、今朝早う参つてごいたけえいうてもお初穂をやることはできんのさ。隣のじいばあさんは、真情に参つてごいたで、それがお金になつただけえ」ということを神さんが言われたそうでなあ。それこつぷり。

解説

この話は稲田浩二編『日本昔話通観』の分類で見ると、「毘沙門の福授け」として登録されており、全国的にも類話のあるものである。筆者も山陰両県でいくつか同類を収録しており、当地にも親しまれている昔話であると思われる。

(元島根大学法文学部教授)